

---

## 第六章 レズビアンの中で人間関係を学ぶ

ミナ汰（一九五六年） 翻訳者

---

### ロンドンの女性センターで

日本の生活が合わず、海外に出た。スペインで五年暮らしたがアウトイングされ、その後は自分のセクシュアリティを隠して暮らしていた。

ロンドンで子どもを産んで（一九八〇年、二十四歳）、父親である男性と一緒に住んでいたんだけど、すぐ隣に地域の女性センターがあつてね。レズビアン、セックスワーカー、有色女性、ワーキングクラスの女性と、四つのグループが活動していた。その座長は、セルマ・ジェームズというユダヤ系の活動家で、元夫がC・L・R・ジェームズという、汎アフリカ主義運動の黒人リーダーだった人。彼女もニューヨークで黒人運動や家事労働の運動をやっていた。フェミニストなんだけど、白人主流のフェミニズムからは異端視されていて、イギリスに渡ってから女性センターをやっていた。

ロンドンの中心の大きな駅のそばで、買春街だったから、セックスワーカーのニーズがあるのね。レズビアンของกลุ่มが何でそこにあるのかなと思っただけで、活動家のほとんどはレズビアンだった。みんな白人に見えるんだけど、実は南米移民の人たちが多くてね。移民のレズビ

アンたちとよくスペイン語でしゃべった。自分には赤ちゃんがいるし、男性パートナーもいるから、向こうはこっちのことを異性愛者だと思っていたみたい。何とか説明しようとしたけど、あんまりよくわかってもらえなかった。でも、すぐ仲良くなって、しょっちゅう出入りしていた。「一緒に運動をやらない？」と誘われたんだけど、自分としては日本に一度、帰りたいかった。

### 結婚はしなかった

子どもの父親とは結婚しなかった。結婚に関しては、中学生ぐらいのときから「自分にはとも結婚は無理だ」と思っていた。近所の男性と仲良くなって、他の家を観察する機会があつてね。「女の腹は仮腹」とか「女は畑で男はそこに種を蒔け」とか、「嫁はお義父さんの世話役」「離縁された母親は子どもを置いていけ」とか、そういう男尊女卑の言葉を聞いてすごくショックを受けて、わりと早い段階で「結婚してしまうとまずい」「日本人男性の子どもは作らない」と決めた。

当時は、女性が外国人と結婚してしまうと、子どもに日本の国籍をあげられないという状態だった。加えて、留学先はカトリックの国で、当時離婚さえできなかったから、そこで結婚して子どもを生むなんて問題外。中絶は違法だし、夫の了承がないと妻は銀行口座も作れない。それが七〇年代のスペインだった。フランコ独裁政権のときの法律がなかなか変わらなくて。だから友達が中絶するときは、みんなでお金を出し合って、イギリスかオランダに行かせていた。フランスもイタリアもポルトガルもカトリックだから、イギリスへ行くわけ。

それに、自分は男の人とは恋愛しないので、女の人と恋愛するときのことを考えて結婚しな

った。なぜ子どもにそんなに興味があったのかはよくわからないんだけど、自分が末っ子で下に子どもがいなかったことや、親に自分を証明したい気持ちもあったのかな。相当のネグレクト状態だったからね。自分には性別違和もあったから、「子どもができるんだろうか」という疑問や興味もあった。

### 帰国、国籍法改正の運動へ

帰国（一九八一年末）したのはビザの問題があったから。あと、子どもがいれば日本も少しは住みやすいかなとも思った。ヨーロッパやアメリカ社会は、大人と子どもの住み分けがはっきりしているから、子どもを育てている人にとってはあまり住みやすくない。子どもを大人の場に連れて行くと、邪魔者扱いされる。日本は子どもがいるというだけで、人を受け入れる土壌があるような気がした。

子どもの父親は「じゃあ日本に行ってみようかな」って軽い感じでついてきちゃった。その頃は、彼に自分のことを説明する言葉をもっていなかった。でも「二人の関係は、弟と兄みたいなものだから」という話はしていた。たぶんよくわかっていなかったと思うし、今でもわかっていないと思う。

帰って来てすぐ、「国際結婚を考える会」という国籍法改正の運動が始まっているのを知って、参加した。娘がロンドンで生まれたときは「結婚しなければ日本国籍をとれる」「子どもの国籍留保という手続きをすればいい」と思い込んでいた。でも、ロンドンの日本大使館の窓口で、国籍留保の届けが受理されなかった。「娘の出生証明に父親の名前が書いてある場合は、たとえ母親が

独身でも受理しない」「父親不明にしろ」「そうすれば日本の国籍をあげる」というわけ。でも「父親不明」にはしたくなかった。実際、不明ではないし、一生ついてまわる書類に嘘を記載するわけにはいかないという自分の責任もあるし。「それはできない」と言ったら「じゃあ父親の独身証明をとってこい」と。

でも、独身証明って、そんなに簡単にとれるものじゃない。彼は南米の人で、故郷にいる家族に「この人は独身です」という証言をもらい、その証明書を首都にある現地の日本大使館に出して、とか、とにかくすごいたいへん。それを三ヶ月かけてやったけど、書類が届いたときには期限切れで、娘の国籍はイギリスだけになった。

留保を受理しておいてくれれば、父親の独身証明の提出が三ヶ月後になったとしても有効なのに、受理をしないで蹴るから、せっかく書類が来ても役に立たなかった。猶予期間も二週間ぐらいしかなかったし、もし出産が重かったら動けないよね。制度自体が非常に理不尽だし、日本大使館は意地悪だし、もうカンカンに怒ってた。

日本に帰って来て定住しても、日本国籍をとる道はなかったの。帰化という方法はあったけど、それは大人にならないとできない。子どものうちに帰化する場合は、外国人の親が帰化するときと一緒にするものだ、とのことだった。

とにかく女性が子どもにも国籍をあげる権利がなかったんだよね。たとえば、母親が日本人で、父親が外国人で、日本に住んでいて日本で生んだ場合、子どもが無国籍になる場合が当時けっこうあった。父の国の法律が「外国で生まれた子どもには国籍をあげません」というものだと、子どもが無国籍になる。だから、国際カップルは、結婚届を出さずに「父親不明」にして出生届

を出さないと、子どもの日本国籍がとれなかった。

土井たか子さんの秘書が「国際結婚を考える会」のメンバーで、土井さんに話を通じて、何回か国会にも行った。土井さんが問題提起をして八四年に国籍法が改正されて、それでようやく、母親が日本人だったら、どこで子どもを生んでも日本国籍がとれるようになった。

ただ「国際結婚を考える」と言われても、ちよつと違和感があったな。まず自分は結婚をしていないし、異性愛じゃないから抱えている問題も皆とは違う。でも、国籍のところでは利害が合うからと思つて関わっていた。

### 日本のレスビアンたちとの出会い

イギリスから帰つてからもう一つ行つたところは「行動する女たちの会」。イギリスの女性センターでいろいろ問題があるということがよくわかつて、日本でも運動に加わりたと思つて探した。それに運動のなから自分を出せるし、日本社会に溶け込む取っ掛かりになるんじゃないかと思つて。日本に住んでいた子どもの頃は不遇だったというか、学校も合わなかったし、登校拒否で長く家に籠もっていたから、帰国してからの社会生活に関しては不安だった。またそういう状態に逆戻りしちゃうと嫌だと思つて。

「行動する女たちの会」がいいんじゃないかと思つたのは、その頃「女らしさ」「男らしさ」をいちばん問題にしていたから。もしかしたら、自分が感じているような性別違和の観点から取り上げているのかもしれないと思つた。それで最初に出かけていったのが、吉武輝子さんのお宅でやった新年会（八二年正月）。そのころはノンケ女性が多くて、それも下ネタノンケというか、「性

をあからさまに話そう」というノリだった。お酒が入っていたからかもしれないけど、二言目にはベニスの話。女が集まっているのに。「性の垣根を超えろ」というのはこういうことなのか」「ちよっと違ったな」とがっかりした。

そのときにWさんに初めて会った。たまたま二人とも先に失礼して、一緒に駅に歩いているときに、「女のパーティーがあるから行く？」と誘われた。行ってみたらJBの家で、自宅を開放してレズビアンパーティーをやっていた。アメリカ人やイギリス人の白人が多かったんだけど、日本人もけっこういた。「ああ、こんなにいる」と思ったよ。でも、ただのホーム・パーティーで、あまり政治に興味があるかんじではなかったけどね。

唯一勢いよかったのは、AHというセパレティスト。「今どうしてるの？」と聞かれたので「子どもがいて、その父親と暮らしてる」と正直に答えたら、ものすごい勢いでかみついてきた。「こんなやつと一緒にいたくない」「この場から出ていけ」みたいなかんじで怒鳴られ、ショックでJBに泣きついたら「気にしなくていいから」って慰めてくれた。

Wさんとはその日から親交ができて、家が近かったから遊びに行ったり、先輩みたいなかんじで話を聞いてもらったりした。Wさんが早稲田でやっていた「スペースダイク」(一九八三)を手伝ったりもした。Wさんの弟さんがもっている小さな店を、夜だけ使わせてもらって、飲み屋みたいにして、お酒を飲んだり踊ったり。長続きはしなかったけどね。

## 新宿二丁目のパーティー

イギリスの女性センターから「メンバーが日本にいるから会ってくれ」と連絡があつて、彼女

が東京に来たときに家に呼んだ。名古屋に勉強に来ていた若い学生さん。彼女と恋愛関係になって、子どもの父親ともめて別れた。彼女とはそんなに続かなかったんだけど、一緒に二丁目に行ってみた。

最初に行ったのは「69」というレゲエ・バー。ミックスで男性客が多かったけど、そこに厚木や座間の基地と六本木の施設から、米軍の女の人たちが来ていた。音楽はティナ・ターナーやウイメンズ・ミュージックで、みんな「ダイクです」っていうノリだった。

米軍に所属していた人たちのコミュニティは、英語を教えているアメリカ人英語教師のコミュニティと行き来がなかった。英語の先生たちは、その頃はあまり二丁目に来てなかったみたい。下北沢の「ぐ」という自然食品屋や「ロックマザー」というミュージックバーに集まっていた。先生は中産階級以上の白人が多かった。米軍のほうは黒人や南部の白人やワーキングクラスの人がいたけど、士官もいた。

八三年、八四年頃に何回か「女のパーティー」に行った。最初は「マコ」を借りてやっていたんだけど、その後「サザエ」(ダイバー「ニュー・サザエ」で開催されていた「日御子」一九八七のこと)に移ったんだよね。女性の日は入りが悪いとか、上がりが少ないとか文句を言われて移ったという話を聞いたけど。女のパーティーには外国人もけっこういた。

その後十年一緒に暮らすことになるAさんとは、その二丁目のパーティーで会った。そのあと米軍の人たちのホーム・パーティーで何度か会ってだんだん仲良くなって、八四年秋ぐらいから付き合い始めた。祖父が亡くなったので、その部屋を片付けて一緒に住み始めたのが八五年の三月頃だったと思う。

## ウィークエンド

国際フェミニスト会議 (International Feminists of Japan: IFJ) ーで、米軍の友達やそのパートナーの日本人が通訳をしたら「通訳がフェミニストじゃない」と抗議を受けて、嫌な思いをしたと聞いた。それで興味がわいて、その次の集まりに参加してみた。それがレズビアン・ウィークエンドの第一回だった<sup>二</sup>。

そこで「れ組のごまめ」というグループがウィークエンドをやっていることを知った。沢部さんに会って『れ組通信』もこの時から取り出したと思う。それから、沢部さんが『女を愛する私たちの物語』(一九八七)の編集を始めていて、この頃、アンケートを配っていた。それに一生懸命答えて、『女を愛する私たちの物語』にも何本か記事を書いた。

その頃のフォビアは相当強かった。ウィークエンドをやっていた埼玉の会館に「こういうものをやっては困ります」という電話が行った話も聞いた。参加者の親が届いたチラシを見て抗議をしたって。会館側もある程度は問題にしてたんだ。「レズビアン」という言葉を告知の黒板に書いたら、「ここには書くな」って消されたり。あと、アメリカ人って抱き合って挨拶するじゃない。それを見た別のイベントの参加者から文句が来たり。ただハグしているだけなんだけどね、「文句が来たからやめさせろ」みたいなことも言われた。

会館側にはレズビアンのイベントだということは言っていたと思う。少なくともプログラムは見せなきゃいけないからね。分科会は全部レズビアンのことでしょ。二重帳簿みたいなものを作るにも限界があるしね。会館は、ホールの黒板に書くことだけはうるさくて、何回か言われた。参



加者からも「書かないでほしい」と言われた。「チラシを送らないでほしい」とか「チラシにはつきりレズビアンと書かないで」といった要望もけっこうあった。

### れ組スタジオ・東京の創設

そうこうするうちに「やっぱり事務所が必要だね」ということになった。当事者の親からみんなに脅しというか、嫌がらせの電話が回ってね。娘のアドレス帳を見てあちこち電話してきたみたいで。当時、沢部さんも学校勤務だったから、職場にチクられても困るし、「自分たちのプライバシーを守るためにも、事務所をもったほうがいい」ってみんなで相談して作った（一九八七年三月一日）。

れ組スタジオの私書箱や郵便貯金の口座を作るときに、『れ組スタジオの郵便物』と言うのがたいへんだ」とちよつと問題になったのを憶えてる。「レズビアン」と言わなくても「れ組」と言うだけで「何だろう」と怪しまれたら困る、ということ、誰が担当するか、少しもめた。口座も、最初は「東京女のセンター」という仮の名前で作ろう、という話になったんだけど、それでは「レズビアン」ということがまったくわからないし、「れ組」はいい名前だし。結局「れ組」を残して、私書箱に郵便物を取りに行くのも、口座を作るのも自分がやった。外部との接触はけっこうやったほうだと思ふよ。それは仕事が自営だったからかもしれない。若林さんも自分も自営だったからできた。どこかに勤めている人はリスクが大きくて、難しかったと思う。

創設資金は、中村遊さん三がけっこう出したと思う。購読者はたくさん集めた。事務所の「ジヨキ」には「阻止連」と「行動する会」と「れ組」の三グループが入っていて、家賃は等分だっ

たから何とかやれた。寄付もけっこうあった。東京から遠いところから振り込みがけっこう来たよ。

### れ組スタジオ・東京での活動

大阪の「女（おんな）のからだ合宿」とか、京都の「女のフェスティバル」とか、いろいろなところに出て行って、分科会をやるのが好きだった。人の話を聞きたかったし、自分のことを知ってほしかったから。「レズビアンの時間」<sup>四</sup>という分科会をやった。東大の大沢真理さんのゼミに行って話したり<sup>五</sup>、法政大の田島陽子さんの授業でも話したり。東北ともつながりがあつて、宮城、青森、山形や岩手で「東北合宿」が開催されるとよく出かけていった。れスタにも、とにかくいろいろなグループの人が訪ねてきてくれたよね。

性教協（日本性教育協会）にも行って話をしたことがある<sup>六</sup>。今でもやっている性教協の調査は、当時、問題があつてね。「同性愛についてどう思いますか」と聞いていて、その回答を自由に書かせるぶんには問題ないんだけど、選択肢が準備されていて、そのなかに「気持ち悪い」とか否定的な内容がずらつと並んでいた。まるで生徒に当事者がいないような作り方だった。そこで「子どもに配るわけだから、クラスに当事者がいるということを前提に作ってほしい」「もう一回作り直してほしい」という内容の要望書を書いて、性教協に出したんだよね<sup>七</sup>。そうしたら最初の調査票は回収してくれた。

調査を担当していた木谷麦子さんは、何かのワークショップでれ組のことを知って、「こういうプロジェクトをやるうと思ってるんですけど」と連絡してくれた。それで関係が始まって、そ

の後、一回か二回、木谷さんたちと対談をやっている。「ヘテロから出る疑問にどう答えるか」というような内容の対談だったと思う。そのとき「どうして子どもを作りたいのか」とか「子どもを作るときにどんな問題があるか」というような質問が出たのを憶えている。で、「異性愛の人たちは、欲しくないのに子どもができてしまうことがあるでしょ」「それと似たようなもので、レズビアンはそのままだったら子どもができないから、欲しければいろいろ工夫しなきゃならないんだ」って説明したと思う。

そのときのことでもう一つ記憶にあるのは、性教協に話をしに行ったら、子どもの保育園のお父さんが来ていて「ヨオ」みたいな感じで会っちゃったこと。もう一人、子どもが小学校のときと同級生のお母さんが学校の先生として来ていて「あら原さん」って。それでも、次の日からすぐに生活が困難になるといったことはなかったから安心して、この頃からだんだん本名を使って活動をするようになっていった。れ組時代のペンネームは「大原なぎさ」で、「大島渚」に本名の原を組み込んだものだった。

### エイズ予防法案の反対運動

エイズ予防法案の反対運動（一九八八）は、若林さんがいちばん一生懸命やったと思うけど、自分もけっこうやったほうで、そのとき初めてアカーと接触したかな。新見さんとか永田さんとか神田さんとか<sup>八</sup>。Wさんは「ゲイが勝手に乱交して感染しているんだから、そんなのやる必要はない。レズビアンの感染者は本当に少ないんだし」<sup>九</sup>って言った。でも、このとき、自分はセックスワーカーの検査のことをメインに反対していた。女性の立場として、そこにこだわらなくて関わった。イギリスでセックスワーカーの人たちと一緒に活動をしてわかったんだけど、彼

私たちは他の女性グループと一緒にやれないようなたくさんさんの問題を抱えていた。それをちゃんと言う人がいないとダメだな、と思った。

アカーは、ゲイのことには積極的で「ゲイのセックスは危険だ」とか「乱交はやめよう」とか言わないようにしながら「より安全にセックスしよう」と戦略的に働きかけていたけど、セックスワーカーの問題には関心が薄かった。本来だったら、ゲイのセックスワーカーもいるわけだから、問題になるはずなんだけどね。

自民党や公明党の議員を訪問したとき、議員秘書の反応は「そういう人たちは人権が制限されても仕方がない」というかんじだった。「いやいや、みんないろんな境遇からいろんな仕事を選んでいる。どんな仕事をやっているから人権がなくても仕方がないというようなことでは絶対ない」と一生懸命言ったんだけどね。

### ある問題　くれ組スタジオ・東京でのく

このあとかなかあ、れ組で一つ問題が出た。あるレズビアンの家族がアンチ・ゲイの宗教に入っていて、家族にすごく圧迫されていた。家を出てパートナーと暮らしていたんだけど、「家族に襲われるんじゃないか」って武装するくらい追い詰められていた。れ組に対して「弁護士を交えて家族と闘いたい」と助けを求めてきたんだけど、れ組はとも対応できなくて。定例会で話が出たときに「それはれ組としては取り上げることではできない」って、誰かがうっかり門前払いしちゃったんだ。それで、その二人は「拒絶された」という気持ちになったみたいで、れ組に対して電話とか電報とかで抗議するようになったのね。こっちのメンバーがダメだったらあっちのメン

パーへと、次から次へと嫌がらせみたいになっちゃって。うちにも電報がばんばん来たので「とにかく会って話そう」と思って、渋谷で会ったんだよね。

そうしたら、ナイフをもって武装してて、二人とも精神的にすごく不安定だった。話を聞いてみると「パートナーの家族が〇〇〇（宗教名）で、二人を引き離そうとしている。自分のことも調べられた。抵抗したらすごいことになるって、人権侵害されている」「何でれ組は何もやってくれないんだ」と切実に訴えられた。そのときは「そこまでできないから」と言うしかなかったんだね。それがわかったときは、メンバーに対する嫌がらせがエスカレートしていて、收拾がつかなくなってたんだよね。

れ組はそういう目的で作ってなかったからね。運動団体としてではなく、どちらかというところ、コミュニティ内の意識啓発団体みたいなかんじだったと思う。「コミュニティにフェミニズムの思想を広めよう」「恋人探しだけじゃなくてももう少し社会的広がりをもたせよう」という趣旨だったと思う。そこから一歩出て、社会の不当な扱いに対して抗議するというような活動はできなかった。もしやるんだったら、別の団体を新しく作らなきゃダメだなと思った。

その時点では誰も、レズビアンとして顔を出してやっていこうという人はいなかったしね。それに、きちんとした仕事やキャリアをもっている人、学歴があって将来のキャリア展望をもっている人たちは、「れ組とはちょっと距離をとったほうがいい」というふうに思っているふしがあった。自分のキャリアに汚点がついちやうとまずいからね。割とゆとりのある人はれ組と距離をとる傾向があったと思う。このこと自体、今とは全然違う。

## タチネコ、セパレティズム

タチネコの問題はねえ、最初からタチの負け戦みたいな感じだった。タチの分が悪いというか、問題が提起されても「真剣に考えよう」というかんじではなくて、結局最後はタチが「どうもすみません」みたいになつてた。Wさんなんかも「さんざんたたかれた」って言つてた。

ネコもたたかれた。ネコはそんなに自己主張が強くなかつたから、たたかれ方も違つていたけど、ネコしてみれば「すごいたたかれ方」と感じたと思う。「スカートを履いてきた」「化粧をしている」「イヤリングしている」「ハイヒールを履いている」とか、そういう女っぽい恰好はたたかれていた。「たたかれないうちの恰好をしない」という雰囲気、この頃にはあつた。

自分は、タチネコ文化というのはあんまり知らなかつただけど、二丁目に行けば「どっち？」って聞かれるから「ああ、そういうの、あるんだな」とは思った。自分としては「ネコ」ではないけど、まだ恋人もいなくて「タチ」アイデンティティがないうちから「タチ」と答えるのも何か違うなと思つていた。

セパレティズムはけっこうあつてね、ウィークエンドに申し込むときに「あなたはレズビアンですか」と聞くか聞かないかで問題になつた。バイセクシュアルを警戒していたのか、ノンケを警戒していたのかはよくわからないけど、最初の頃は、ノンケのフェミニストで話を聞いてみたという人もウィークエンドに来ていて、分科会で「私はヘテロで、よくわからないんですけど」とか言うたびに「またそういうことを言つて」って誰かが怒つて紛糾。それで参加資格を問うようになつていった。

自分も「レズビアンですか」と聞かれたと思うんだけど、そういうのを聞かれたり、聞いたりするのは不愉快だと感じた。「レズビアン」という言葉に対して、皆それぞれイメージが違うから。「そう簡単に聞かれても、あなたの言っているレズビアンと、自分の言っているレズビアンは同じじゃない」って反対した記憶がある。それで、口頭で直接聞くのはやめたような気がする。申し込み用紙には書いていたかもしれない。それまでは電話で聞いていたんだよ。電話で見ず知らずの人に「あなたはレズビアンですか」って聞かれるのは、ちょっとやりすぎだと思った。

バイセクシュアルの人はずっと来ていて、やっぱり毎回ウィークエンドで問題になっていた。あんまり問題になるんで、バイセクシュアルの人を含めたウィークエンドと、レズビアンだけのウィークエンドを交互にやるうということになった。けっこう早いうちからそれは問題になってきたけど、じゃあ「何でバイセクシュアルが嫌なのか」という理由は、とくにはつきり出なかった。結局、セパレティストの人たちがウィークエンドをサポートするエネルギーというのはすごく大きいから、その意見を無視できない。かといって、「バイセクシュアルの人が問題だ」と思っている人はそんなに多くない。だからずいぶん長い間、問題になっていたと思う。

れ組は、ウィークエンドほど分離主義的ではなかった。結婚している人も来ていたし、子どもがいる人のなかには結婚していた人もいるし、レズビアン・マザーのグループっていうのも小さくやっていたから。でも、ときどき問題にはなっていたような気はする。

## ALN（一九九二年五月）

ALN (Asian Lesbian Network) 〇〇の実務はPDと自分で事務局みたいな仕事をやっていた。

あと月森さんとか敦賀さん、朝風さん、Tさんなど、若い人たちもすごくやっていた。

若林さんたちが「ALNはこういうものだ」というパンフレットを出したんだけど、若い人たちから「ちよつと難しい」「自分たちの感覚とは少し違う」という声が出た。それで、若い人たちが「ALNって言うてるけど実際は何なの？」というような対談をやつて、それをまとめた『ALNってなんザンショ！』という冊子を撒いたのね。その提案がすごく良かったから、話し合いのセッティングをしようとしたけど、結局できなかつた。若い人たちからの提案はほとんど受け入れられなかつたけど、「ALN会議」が「ALNまつり」になった。若い人たちは「会議」と固い「自分たちと関係のないかんじがする」と言っていて、それで「まつり」になった。そこは譲歩したんだけど、それ以上の話し合いは行われなかつた。譲歩するよりは、ちゃんと話したほうがいいっていつも思うんだけど、どうもそれができないまま、形だけ変えるんだよね。

タイで開催された第一回では、議長が白人だった。タイの人たちはそれでよかつたんだけど、アメリカに住むアジア系の人たちが「これはアジア会議なのに、何で議長が白人なんだ」と抗議をした。議長は「自分はタイに住んでいて、もう長いし、自分が立候補したらみんながオーケーしたから」と説明したんだけど、「おかしい、おかしい」って紛糾した。すぐく険悪な雰囲気になつちやつてね。タイ人のなかには白人をパートナーにもつ人もいたし、開催にエネルギーを注いだ白人もいたから、問題になつちやつて。うちらはそれを見て「これは日本でも絶対問題になる」「何とかしないとけない」と思つて、何回も話し合った末に、LALAとALNを分けた<sup>二二</sup>。

それは話し合いの結果、納得済み。もちろん白人のなかには、このやり方に不満の人もいたと思うよ。でもLALAは「それでもやる」という人たちだけでやった。LALAの人たちにも、



細かいところでかなり手伝わってもらった。でもALNのときは、若い人が多かったから、いつものれ組のイベントとは違って、おおぜいが関わったと思う<sup>一三</sup>。

イベント自体は楽しかったけど、やっぱりわかっていなかったことがあったと思う。白人とアジア系レズビアンのアメリカでの対立というのは予想していたんだけど、日本のなかでの在日コリアンの人たちと日本人との力関係の問題は、アジア系アメリカ人には見えていないから。彼女たちは、日本には日本人しかいないと思っていた。

日本人の主催者も、日本のなかの問題を十分自覚していなかったと思う。チラシには「日本のアジアにおける侵略行為が」と書いてあったけど、アジアのなかで日本がどう思われているのかという自覚はそれほどなかったと思う。もしあったら、そんなこと、簡単に声明文に書けないだろうから<sup>一四</sup>。

フィリピンに住んでいたときの親友に伯母がいたんだけど、その伯母さん、足が一本なくてね。小さいときに日本軍に足を切られたんだ。バスケットのなかに食べ物を入れて歩いていたら、「スパイだ」と疑われて切られたんだって。七歳か八歳のときのこと。アジアってそういう戦場だったところだから、かなり深刻なことだよ。かけ声だけで済むような話ではないと思う。

ALNまつりでは「日本の侵略行為を考えましょう」という雰囲気はまったくなかった。「みんな楽しんでみましょう」という感じで、テーマとしては「アジアのなかでのレズビアンアイデンティティを確認しよう」というものだった。そういうことだったら、「そのテーマについて話をする場」ということでやるしかないと思うのね。だから、PMさん<sup>一五</sup>のやったワークショップの「日本の侵略行為を知らせたい」というテーマは、ALNのテーマとちよつとずれていた。「日本

の在日韓国人のレズビアンのことを」というテーマだったら、もう少しALNのテーマとも咬み合っていたと思う。「日本軍のやったこと」というテーマは、どこかでやる必要はあるけれども、ALNのテーマからすれば、そこでやること自体に無理があったと思う。でも、ALNの声明のなかに「アジアにおける日本」云々といったことを書くから、そういう期待をもつ人が来るわけだ。そういうところから既にねじれていた。できないことは、やっぱり出さないほうがいいと思う。自覚がないのがあるふりはしないほうがいいと思う。

「日本に住む日本人」と司会が言ったとき、うちらはそのことに気づいていた。でもその後に「日本に住む外国人」というのが当然来るんだと思って、待っていた。だって「日本に住む外国人」と言うために「日本に住む日本人」と言うわけでしょ。でも、いつまで待ってもなかったわけ。それで「あれ、言っていないよ」ということになって、そのあと問題になった。PDも「自分は立つ機会がなかった」と言っていたし、日本に住む外国人はけっこう多かったから。

それだけではなくて、PMさんのワークショップに日本人が全然来なかった。従軍慰安婦のビデオを上映したり、日本軍の加害行為のパネルを展示したりした。場所も行きやすいところで、外国人はけっこう行ったのに、日本人は行かなかった。でも、彼女がいちばん来てほしかったのは、日本人のレズビアンだったと思う。彼女が怒るいちばんの理由はそれじゃないかなと思う。その「無視」「無関心」というのが悔しかったんだと思う。

『れ組通信』にALNの報告記事が載ったあと、彼女はすごく怒って手紙を出してきた。報告には、「日本に住む日本人」の一件が触れられていなくて「ちよっとしたミス」ぐらいに思っているんじゃないかと。あと、受付のときに名前を「日本読み」で呼ばれたことに怒っていた。やっ

ぱりいくつもあったんだよね。彼女は、もしかしたら一言あるんじゃないかと思って、待っていたんだよね。ところがみんなが「良かった、良かった」みたいに終わらせようとすることから、怒って手紙を出してきたんだ。

みんなは、どれくらい怒っているのかがわからないみたいだった。「何でこんなに怒るんだ」みたいになって、相手の言っていることも理解できないし、それで返事もとんちんかんになっちゃうわけだ。いつまでも話が収まらない。P Mさんからは謝罪文を求められたので、自分は「出したほうがいい、大阪まで渡しに行く」と言った。どういう文面にしようかということになって、「とにかくこちらが無関心だったわけだから、もつと積極的に関心をもっていきたい」という内容を提案したんだけど、「お互いのことをわかり合いたい」というふうにしたいという意見が強かった。「アメリカでは日系が差別されているんだから、そんなお互い様でしょ」という気持ちがあったみたいだね。結局そういう文面のももって行かざるを得なくて、自分とPDが一緒に大阪に謝罪文を持参した。大阪の部落解放同盟の事務所を借りてもらって、そこでやった。そうしたら案の定「こんなのおかしい」と言われた。東京に戻って「これじゃ通らないから直してくれ」と言っただけで最終的には書き直してもらった。それを送って、ちよつと様子を見ようということになったわけだ。

でも、謝罪はしたけどその後も状況は何も変わらなかった。その後、とくに関心が高まったというかんじでもないし。そんなに一度に変えるのは無理だよね。結局、何かあったときに個別に誠実にやっていくというのが、唯一できることだと思う。毎回毎回そのつどね。それをしているかないと、謝罪をしてもまた同じことになると思うんだよね。

この一件のあと、れ組から少しずつ距離をとるようになった。やっぱりALNの経験は大きかったよ。建前と中身というのは多少は乖離するものだけど、ALNはあまりに矛盾が吹き出過ぎていた。白人の社会のなかの有色人種差別ばかり見ていて、日本のなかの民族差別問題が出るを受け入れられない。でも、自分も差別されているんだってたら人の訴えもわかるはずだし、好きで差別をしているわけではないのだから、直せるところは直したいと思っっているはず。だから、指摘されたら、一つずつわかっていけばいいと思うのね。知らずにやってしまっていることもあるからね。

このときいちばん思ったのは、本音で話し合うことが大事なのに、当事者同士できちんと話をする方法を知らない、ということだった。だから自助グループをやったほうがいいんじゃないかなと思った。その頃ちょうど、性虐待の自助グループづくりを呼びかけていたから、れ組でも「LIP」というのをやってみただけど、上手くいかなかったんだ。お互いに知りすぎていてなかなか心を開けない。話も白々しくしか聞こえない。「ああダメなんだ」「外に出てやったほうがいいな」と思って、れ組とは関係ないところで自助グループを呼びかけ始めた。

一 一九八五年六月「第二回国際フェミニスト会議」のこと。埼玉国立婦人会館にて。

二 一九八五年十一月二、三、四日「レズビアン会議」（主催 東京国際女性グループ）のこと。埼玉国立婦人会館にて。

三 「れ組スタジオ・東京」のメンバー。「六十四歳にしてギョーカイデビュー 中村遊さん、今七十二歳」『フリー

『ネ』第一号（一九九五年六月十五日発行）、一五六―一七ページ、「直撃 七十二才レズビアンおばあちゃん」『女性性ブズン』一九九五年六月十五日号、二二九―二三二ページで、彼女の足跡を知ることができる。

四 一九八八年六月四、五日「女（わたし）のからだ合宿 大阪」で分科会「レズビアンの時間」を開催。

五 一九八九年九月一日、東京大学社会科学研究所のゼミ、フェミニズム講座（担当教員は大沢真理）に、四人のレズビアンがゲスト・スピーカーとして参加。『れ組通信』三十二号にスピーチの詳細が掲載されている。

六 一九八九年一月十四、十五日、「人間と性 教育研究協議会」のセミナリーに、れ組スタジオ・東京のスタッフがパネラーとして参加。

七 一九八九年十月十二日、「人間と性」教育研究協議会「同性愛プロジェクト」が実施した一般向けアンケートに対して、れ組スタジオ・東京の大原なぎさが偏見に満ちた設問があるとの抗議文を送付、それに対する回答を得る。「今後アンケートを一切実施しない」「すでに実施した分についても結果を公開しない」との返答。

八 一九八八年七月十日「ぶつつぶせ！ エイズ予防法案」の第二弾のテーマは「売買春問題からエイズを考える」で、れ組スタジオ・東京とアカーとの共催だった。新宿区立婦人情報センターにて。

九 「国内初の女性患者」として認定されたのがセックスワーカーだった。

一〇 アジア系レズビアンネットワーク。一九八六年、ジュネーブで開催された国際レズビアン会議において、タイの人の呼びかけで作られた。詳しくは第二章を参照。

一一 *Lesbian Affirming Lesbian in Asia*＝アジアのレズビアンを肯定するレズビアン。ALNをサポートするため「に作られた」、日本に住む白人レズビアンの集まり。

一二 五月二、三、四、五日にALNまつりとレズビアン・ウィークエンドが同時に開催された。ALNには「アジアに住むアジア系のレズビアン」および「アジア以外に住むアジア系レズビアン」が参加し、「アジアに住む非アジア系レズビアン」は同時開催されたレズビアン・ウィークエンドに参加することになったため。

一三 「参加者は一七〇余名、日本から約一三〇名、海外四〇名」と報告されている『れ組通信』六十四号、四ページ。

一四 第二回ALN会議声明文には「ALNの目的」として次の五つが掲げられている。「一 全世界のアジア系レズビアンが集まって自分たちの歴史や近況、体験について話し合えるようきっかけを提供すること。二 アジアにおけるレズビアンの権利を各国の状況の中で打ち出すこと。三 将来の見通しと取り組み方を発展させていく

こと。その中にはグループや個人をサポートして私たちの存在を目に見えるようにすることや各国内でネットワークすることを含んでいる。四 アジア系レズビアンとしてのアイデンティティ||自己認識を深め、アジア系レズビアン<sup>一五</sup>の視点からレズビアンニズムを考えていくこと。五 アジア内外に住むレズビアン間のつながりを強めること」(『れ組通信』六十三号、十四ページ)。

<sup>一五</sup> PMは、ALNに参加した在日韓国人である。『れ組通信』六十三号(一九九二年六月二十二日号)に「在日韓国人の立場で感じたこと」(二一三ページ)と題して、ALNに対する落胆と批判を寄せている。PMの抗議の内容は、れ組スタジオ・東京の会員、町野美和が『れ組通信』において詳しく報告している(『れ組通信』六十三号、七十八ページ)。

聞き手・まとめ・脚注 杉浦郁子

二〇〇八年五月二日 東京・新宿の喫茶店にて